

『かわいい浮世絵』

日野原 健司／著 東京美術（2017年）

浮世絵とは、江戸時代に人々の暮らす社会（浮世）を題材にした版画です。風景や人物などいろいろな作品が残されています。

この本では、特に動物などかわいいものを集めて紹介しています。金魚の親子の絵や、タコがハチマキを巻いてタコ踊りをしたり、カエルが忠臣蔵の一場面を演じているものも紹介されています。また、当時の学校である寺子屋で、生徒が先生をからかっている様子は、現代の学校での一場面と似たところがあり面白いです。ぜひ、興味をもって美術館で実物を観賞してみましょう。



『美術館へ行こう ときどきおやつ』

伊藤 まさこ／著 新潮社（2018年）

北は北海道の斜里町から、南は九州の鹿児島まで、全部で24の小さな美術館が紹介されています。大きい美術館ではなく、家の近くにあるような、身近にある美術館です。気が向いたらふらっと立ち寄れる、そんな美術館にはどんなものが飾られているのでしょうか。思いもよらない展示に出会えるかもしれません。

また、各美術館に併設、もしくは近くにあるおやつが食べられる場所も紹介されています。どのおやつもおいしそうなので、美術館に行かれた際はぜひ立ち寄ってみてください。



『写真をかわいくとっておく』

フォトデコのためのアイデア集』

エディション・ドゥ・パリ／編

エディション・ドゥ・パリ（2011年）

家族や友達と出かけたときや、心ひかれる風景に出会ったとき、つい写真を撮ってしまうという人は多いのではないのでしょうか。撮った写真はどのように保存していますか？データで見返すのも楽しいですが、特別な写真はプリントしてみましょう。手作りのフォトフレームやアルバム、写真を使った雑貨のアイデアがこの本にはたくさん載っています。お気に入りの写真をおしゃれに飾れば、華やかで心弾む空間のできあがりです。



『デトロイト美術館の奇跡』

原田 マハ／著 新潮社（2016年）

表紙の肖像画はセザンヌの妻オルタンスです。この絵画はデトロイト美術館（DIA）の一角に展示されています。自動車工場で働くフレッドは、月に一度、妻と共にこの《マダム・セザンヌ》に会いにきていました。二人にとって、この絵画は“美術品”ではなく“友人”でした。2013年、フレッドはデトロイト市の財政破綻を知ります。さらに市が破綻の穴埋めとして、DIAのコレクション売却を検討している事も。友人を助けたい！フレッドの思いが、素晴らしい奇跡をおこしました。



『ご近所美術館』

森福 都／著 東京創元社（2012年）



平凡なサラリーマン海老のんこと海老野が勤める会社の近所に「西園寺英子記念四コマまんが美術館」がある。建坪三十坪ほどの俗に言うペンシルビルだ。入館料二百円で館長自ら淹れたコーヒーとラウンジが使用でき、ぼくは昼寝やちょっとした仕事までできる隠れ家として美術館を使用している。館長が持病の悪化を理由に引退し、代わりにやって来た館長の遠縁、川原姉妹の姉・董子（とうし）に一目惚れをする。董子を振り向かせたい一心で、来館者の持ち込む謎を次々に解決し、美術館専属名探偵と言われるまでになるが、美人館長には当然ライバルも。どうする海老のん。

『美術ってなあに？』

“なぜ？”から広がるアートの世界』

スージー・ホッジ／著 小林 美幸／訳

河出書房新社（2017年）

この本では、紀元前の作品から、20世紀に入ってから作品まで、様々な作品が簡単に面白く紹介されています。有名な作品も多数載っており、美術用語集も付いているので、美術に興味をわき始めた方にぴったりの1冊です。それぞれの作品について、疑問点や注目してほしい点などが書かれています。美術館などに行った際に、自分自身で疑問点や注目する点を見つけるきっかけになるかもしれません。

